

# 温泉

おんせん

## 古代人もはいつた！

古代人にとって、疲れたとき、また病気になったとき、それらを癒してくれるものは何だったのでしょうか。

今も昔も、それらを癒してくれる代表的な存在は温泉でした。『出雲国風土記』では、玉造温泉・湯村温泉・海潮温泉の三カ所が紹介されています。その記述からは、古代人も変わらず温泉を楽しんでいた様子がうかがえます。

また、医術の進歩していない当時、温泉は無上の療養所だったでしょう。古代人たちが温泉にはいつてくつろぐ姿を想像するといなかなか楽しいものがあります。



## 玉造温泉

玉造町玉造湯町

忌部神戶。郡家の正西二十一里二百六十歩なり。國造神吉詞家して朝廷に参向ふ時の御沐の息玉作る。故忌部と云ふ。即ち川の邊に湯を出す。出湯の在る所は、海陸を兼ねたり。仍りて男も女も、老いたるも少きも、或るは道路を駱駝心、或るは海中を洲に沿ひ、日に集ひて市を成し、繽紛燕樂ぶ。一たび濯げば形谷端正しく、再び浴すれば、萬病悉に除く。古より今に至るまで、驗を得ずといふことなし。故、俗人、神湯と曰ふなり。

「存じ島根県を代表する温泉で、記述を見るに当時から若男女、多くの人が毎日のようにやってきてにぎわいをなし、酒宴をひらき遊び楽しんでいた様子がいきいきと描かれている。

この温泉は一回洗えば、容姿が美しくなり、ふたたび入浴すれば、すべての

病気が治つてしまつたという、誠にありがたい温泉であつたらしい。ゆえに当時の人は「神の湯」と呼んでいたようだ。今でもこの温泉は万病に効果があるとされてあり、『出雲国風土記』の記載はまさにそのとおりと言える。

## 湯村温泉

吉田村川手



通道。飯石郡の堺なる深仁川の邊に通ふは二十八里なり。即ち川邊に薬湯あり。一たび浴すれば則ち身體穩平き、再び濯げば則ち萬の病消除る。男も女も、老いたるも少きも、晝夜息まず、駱駝往来ひて、驗を得ずといふことなし。故、俗人、號けて薬湯と云ふ。即ち正倉あり。

斐伊川上流の溪谷にわく温泉で、奥出雲の交通に不便な地であつたにもかかわらず、玉造温泉と同様、多くの人が日夜を問わず訪れていたとある。宴樂の記述は見られないが、万病に効く温泉であつたらしく、当時の人びとに薬湯と呼ばれていたほど効果があつたようだ。やはり今でも万病に効果があるといふ。

## 海潮温泉

大東町中邊石



海潮郷。郡家の正東一十六里三十三歩なり。古老の傳へに云へらく、宇能治比古命、御祖須義禰命を恨みて、北の方、出雲の海潮を押し上げて、御祖神を漂はしとき、此の海潮至りき。故、得鹽と云ふ。神龜三年、宇能海潮と改む。即ち東北、須我小川の湯淵村の川中に温泉あり。號を用みず。同じ川の上的、毛間村の川中にも温泉出づ。號を用みず。

その名とは逆に奥出雲の山あいにある温泉である。神話によると、その昔、神様が海水をこの地まで押し上げたから海潮と名がついたとある。しかし玉造温泉などに比べると記述が寂しい。なぜなら、川の中わにわいていたため十分に利用されなかったのかも知れない。現在は旅館が四軒並んでいる。

# 川湖池沼

かわみづうみ いけぬま



斐伊川（下神原付近）

島根県は宍道湖や中海をはじめ、豊かな水資源に恵まれています。『出雲国風土記』では宍道湖・中海は「入海」、日本海は「大海」と記され、水産資源などがくわしく紹介されています。また「入海」「大海」にそそぐ川や池なども多く記載されています。

これらの記載は、私たちの郷土の古地形について貴重な資料を提供してくれます。今はなくなつた池、工事や洪水で流路を変えた川、かつてあつた湖などをたどつていくと、郷土の歴史への新たな思いがわいてきます。この章では、『出雲国風土記』に記された川の現在の様子を中心に、風土記の書き下し文をそえて紹介していきます。

### 出雲郡

出雲大川。源は伯耆と出雲との二國の堺なる鳥上山より流れて、仁多郡横田村に出で、即ち横田・三處・三澤・布勢等の四郷を経て、大原郡の堺なる引沼村に出で、即ち來次・斐伊・屋代・神原等の四郷を経て、出雲郡の堺なる多義村に出で、河内・出雲の二郷を経て北に流れ、更に折れて西に流れ、即ち伊努・杵築の二郷を経て、神門水海に入る。此は則ち謂はゆる斐伊の河下なり。河の兩邊は、或は土地豊かに沃えて土穀・桑・麻、稔り欵々に、百姓の膏腴の園なり。或は土體豊かに沃えて、草木叢り生ひた

則ち年魚・鮭・麻須・伊具比・魴鱒等の類あり。潭淵に雙魚泳ぐ。河口より河上の横田村に至るまでの間、五つの郡の百姓、河に便りて居めり。出雲・神門・飯石・仁多・大原の郡。孟春より起めて季春に至るまで、材木を投る船、河の中を沿浜る。

**仁多郡**  
横田川。源は郡家の東南三十五里なる鳥上山より出でて北に流る。謂はゆる斐伊河の上なり。年魚少くあり。

**大原郡**  
斐伊川。郡家の正西五十七歩なり。西に流れて、出雲郷の多義村に入る。年魚、麻須あり。

三郡にわたつて記載された斐伊川は、鳥取県との県境にある船通山を源とする全長七五・二キロの出雲を代表する河川である。流域は、仁多郡・飯石郡・大原郡・出雲市・簸川郡・平田市の二市四郡に及び、当時は「神門水海」(現在の神西湖のあたり)を経て、日本海へとそそいでおり、現在のように宍道湖にそそぎ始めたのは寛永年間(十七世紀前半)のこと。上流は「八岐大蛇」の神話の舞台にもなっている。

近世タタラ製鉄が盛んになると、砂鉄採取のための鉄丸流しが行われ、多量の砂が流出して「天井川」(底がまわりの土地よりも高くなつた川)となり、このため洪水がしばしば起こるようになった。県政百年の大計」と言われる改修事業は、現在も進行中だ。